

### 高校生における「居場所」としての学校の認知について

渡辺, 弥生 / KOTAKA, Sayuri / WATANABE, Yayoi / 小高, 佐友里

---

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学文学部紀要 / Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University

(巻 / Volume)

53

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2006-10-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004127>

# 高校生における「居場所」としての 学校の認知について

渡辺 弥生・小高佐友里

---

## 要 旨

---

本研究の目的は、高校生が学校を「居場所」としてどのように認知しているかを検討することである。居心地のよい場所は、日本語では「居場所」と訳される。他者との関係だけでなく物理的なものとの関連性という観点からみて、特別にリラックスでき、かつ安全な空間を個人が求めていることを前提としている。被験者は1年生から3年生351名であり、「居心地のよい」「居心地の悪い」のイメージをSD法によって評定する質問紙が与えられた。また、居場所のイメージを描画することが求められた。結果から、居心地のよいところも悪いところも3つの因子から構成されており、共に「物理的評価（力動性）」、「物理的評価（機能性）」、「関係性」因子から構成されていた。描画のイメージは、6つのカテゴリーに分かれ、「風景（屋外）」、「風景（屋内）」、「自分の部屋」、「好きなもの」、「趣味やアニメのキャラクター」、「人のみ」であった。理想の「居場所」イメージとして学校を描く生徒はほとんどいなかったことや、女子生徒が男子生徒よりも人の存在を示す絵を描く傾向の強いことが明らかになった。

キーワード：居場所、イメージ、学校、高校生

---

## 問題と目的

文部省（1992）が「学校が児童生徒にとって自己の存在を実感でき、精神的に安定していることのできる場所（「心の居場所」）としての役割を果たすことが必要」という視点を打ち出して以来、学校場面における「居場所」の存在が注目されるようになった。萩原（2001）は、1980年代までに学校以外の行き場（フリースクールやフリースペースなど）として使われていた「居場所」という言葉が、学校をも含めた心理的な側面からも語られるようになったとし、これは学校を「居場所」という観点から問い直さざるを得ないほどに、不登校の増加やいじめによる自殺が相次いでいたためであると指摘した。また、田中（2001）は「心の居場所」という表現が公文書に用いられたこと

によって、「居場所」という通俗的な用語が時代背景をもった特殊な響きをもって語られる契機になったとしている。このように、現代の学校教育について考える際のキーワードとでもいえるべき「居場所」であるが、未だ概念についての統一的な見解はなく、明確なデータを示した実証的研究も少ないのが現状である。その中で、住田（2003）では、「居場所」の意味や一般的な使われ方としては、自己を再確認させてくれるような、そして自己受容感や自己肯定感、自己存在感を感じさせ安定感や安心感といった感覚を実感させてくれる場所として表現されている。また、「居場所」の構成条件には自分がそこを「居場所」として実感し、そこに意味を付与する「主観的条件」と、関係性と空間性からなる「客観的条件」の2つがあると指摘されている。こうした意味で本研究においても「居場所」を居心地のよい場所とし

て捉えるものとする。

学校場面を対象とした「居場所」研究として藤井(2003)は、小・中学生を対象に学校生活の楽しさを手がかりに、教師や仲間などの学校における対人関係と子どもの「居場所」意識との関連を調べた。子どもが学校生活を楽しんでいると感じ、学校を自分の「居場所」として捉えることができるかどうかは、主に教師と子どもとの対人関係、子ども同士の仲間関係によって左右されると指摘している。また、富永・北山(2003)は中・高・大学生の「クラス」、「友人」、「家庭」の3つの場面における「居場所」感覚の評定を比較することで、「居場所」形成における発達の動向を検討し、家庭や友人関係が学校段階に応じて「居場所」となり、それらに支えながら心的成長の著しい青年期を乗り越えていくと述べている。さらに、場面を学校に限定していないが、中・高・大学生から得られた心の「居場所」での「感情」、「行動」、その「意味」についての記述を考察する中で、どの学校段階においても「友だち」が心の「居場所」として最も多くあげられており、「居場所」には他者の存在への思いが込められているとの指摘もある(小畑・伊藤, 2001・2003)。これらの先行研究を概観してみたところ、学校場面における「居場所」形成においては、教師や仲間との対人関係のあり方が重要な役割を果たすとの指摘がなされていることがわかる。

一方、対人関係ではないが、物理的な学校空間が「居場所」形成に及ぼす影響について検討したものもある。鈴木・中野(2000)は、長年、学校建築の主流として存在してきた片側廊下式・鉄筋コンクリート造りの学校と、生徒一人ひとりの興味、関心、特性に応じる新しい学習空間として導入された、オープンスペースを持つ学校に通う中学生の行動や空間に対する捉え方の違いを比較し、学校空間のあり方が生徒の心の「居場所」づくりに役立つ可能性を指摘した。また、子どもたちの「生活空間」および「居場所」としての学校のあり方を施設・設備面の改革から見直そうとする取り組みも行われている(中野, 1997)。ただし、

これらは実践の報告にとどまり、実証的な検討はなされていない。学校は日常生活において子どもたちが大半の時間を過ごす空間であるだけに、空間の有する物理的側面が生徒の「居場所」形成に与える影響についても検討する必要があると考える。

また、これまでは「居場所」イメージを記述させ、その表出語を手がかりに「居場所」のあり方を検討する研究法が多くみられたが、概念自体が統一されていない現状においては、言葉や文字として表現される記述だけで実態を捉えていくのには限界があると思われる。投影的手法は、解釈が恣意的となる恐れがあり客観性に欠けるとの批判もあるが、非言語的イメージを媒介とし「居場所」についての表現を促進させるアプローチとして、中村(2000)によって「○△□(まる・さんかく・しかく)法」といった独自の手法が考案されており、「居場所」イメージを媒介に対象への理解が深まることも指摘されている。また、やまだ(2003)では、「理想の居場所を描いてください」という教示文を設定し、「寝る」、「坐る」、「立つ」といった身体イメージから「居場所」についての検討を行っている。理解の補助的手法として、また発想を得る手がかりとして、質問紙では測ることのできない、潜在的な要因について検討するためにも中村や、やまだを参考に投影法を用いた研究法を併用することで、多側面から概念を捉えていくことが望ましいと思われる。特に、本研究では学校が「居場所」となっているかどうかを明らかにするために「居場所」を自由にイメージさせ、学校がどのように表現されるかを検討する。

対象に注目して先行研究を概観すると、小学生から大学生といった様々な学年段階において調査が行われているが、その中でも高校生を対象とした研究は少ない。また、多くの高校生が学校を中途退学し、その後の行き場を見失っている問題が、小・中学生の不登校問題の陰に隠れて見過ごされがちであることが指摘されている(荻原, 1995)。高校全人の時代と言われる現代において、若者にとって学校は重要な生活場面のひとつであり、高

校生の学校における「居場所」のあり方を詳細に捉えることが必須であると考えられる。

また、「居場所」形成においては性差が見られ、男子よりも女子の方が対人関係を重視しているとの指摘がある（大久保，1999；秦，2000）。対人関係の発達に関する研究では、男子が自分と友だちは異なる存在であるとの認識を持って付き合っているのに対し、女子は理解、共感といったお互いがひとつになれるような関係を望んでいるという指摘をはじめ（落合・佐藤，1996）、活動・感情・欲求といった様々な側面において男女による特徴的な差異が見られることが明らかとなっている（榎本，1999・2000）。思春期・青年期における対人関係をめぐる性差は、生徒の実態を把握する上で重要な視点であり、「居場所」形成に及ぼす影響についても検討する意義があると考えられる。

以上より、本研究では関係的側面に加え、空間の有する物理的側面と「居場所」イメージとの関係について検討する。検討方法はSD法による質問紙のイメージ測定に加えて、投影的な手法を併用し、理想の「居場所」イメージを生徒自身の描画の中から明らかにする。その際、性別による捉え方の違いも検討する。

## 方 法

### 1. 対象・期間

私立高校生徒（1～3年生）351名（男子148名、女子203名）を対象に、無記名による質問紙調査を行った。実施期間は2003年7月14日から18日の5日間であった。なお、対象者の内訳は1年生109名（男子46名、女子63名）、2年生138名（男子59名、女子79名）、3年生104名（男子43名、女子61名）であった。

### 2. 質問紙

#### 1) 質問紙1：居心地がよいと感じる場所

学校場面で最も居心地がよい（「居場所」である）と感じる場所について自由記述させた。さらに、記述した場所への評価を検討するための15

項目を設定し、SD法による5段階評定を求めた。15項目の内訳は、鈴木・中野（2000）が学校空間のイメージを測定するために選択肢式で回答を求めた「明るい」、「暗い」、「広い」、「狭い」などの20語を、「明るい—暗い」、「広い—狭い」とった対の形で配置した10項目と、中村（1999）によって指摘されている場所への慣れを示す項目「なれている—なれていない」、さらには「にぎやか—寂しい」、「会話がある—会話がない」といった、「居場所」に他者が存在していることを予想させる項目など5項目の計15項目であった。

#### 2) 質問紙2：居心地が悪いと感じる場所

質問紙1の教示文の「居心地がよい」を「居心地が悪い」に、「居場所である」を「居場所でない」に代えて用いた。場所への評価を検討する項目については、質問紙1で採用したものと同様の15項目を用い、SD法による5段階評定で求めた。

#### 3) 質問紙3：理想の「居場所」イメージ

潜在的な「居場所」要因について検討するために、やまだ（2003）を参考に教示文（「あなたにとって居心地のよい場所（居場所）のイメージを自由に描いてください」）を作成し、理想の「居場所」イメージを描かせた。絵の苦手な生徒のために、描画に対する説明を加えることも可とした。さらに分類の際の参考とするため、自分の「居場所」に必要なものを欄外に自由記述するように求めた。また、質問紙では学校場面における「居場所」と限定したが、投影的手法においては、すべての生活場面を対象とした。これは、自由に高校生がもつ「居場所」をイメージさせ、その中に学校がどれだけ選択されるかという点について検討することを意図したためである。

### 3. 手 続 き

調査を行った10クラスのうち7クラスについては、授業時間内に担当教師が配布・回収する形式をとった。カリキュラムの都合で実施することができなかった3クラスについては、各クラスの

担任教師がホームルームで配布し、翌日回収した。回収した質問紙は、統計的に処理され個人が特定されることも成績にも関係がないこと、教師が目を通すことはないのも思ったまま率直に答えてほしい旨を生徒に伝えた。

## 結果と考察

### 1. 学校における「居場所」イメージについて

#### 1) 居心地のよい場所の因子構造

居心地がよいと記述された場所の因子構造を検討するために、場所の特徴を示す15項目について因子分析を行った。その結果、固有値の変化を基準に3因子を抽出した(主因子法・プロマックス回転)。「広い—狭い」、「サポートがある—サポートがない」の2項目に関しては、どの因子に対しても負荷が低かったため、分析から除外し13項目について再度分析を行った。男女間の構造の違いについては、因子間で多少の変動もみられたが、2因子にまたがって同程度に負荷している傾向があり、いずれも因子構造を大幅に左右するもので

はないと判断したため、男女込みの分析とした。回転後の各項目の因子負荷量はTable 1に示した通りである。原則として、ひとつの因子に.40以上負荷しているものを各因子を構成する項目として採用し、解釈を行った(2因子にまたがって負荷している項目に関しては負荷量の高い項目を優先し、「開放的—息苦しい」は.39の負荷ではあったが.40と同等とみなした)。第1因子は「わくわくする—憂うつ(.82)」「あたたかい—つめたい(.69)」などの4項目からなり、場所に対する評価のうち、感情の動きを示すと思われる項目から構成されていたため「物理的評価(力動性)」と命名した。第2因子は「落ち着いた—雑然とした(.83)」、「静か—騒々しい(.78)」などの5項目からなり、場所に対する評価の中でも物理的な機能を示すと思われる項目から構成されていたため「物理的評価(機能性)」因子と命名した。第3因子は「にぎやか—寂しい(.83)」、「会話がある—会話がない(.78)」など4項目からなり、そこでの他者との関係のあり方を示すと思われる項目から構成されていたため「関係性」因子と命名した。

Table 1 居心地のよい場所の因子負荷量

項 目	F 1 物理 (力動)	F 2 物理 (機能)	F 3 関係性	共通性
8. わくわくする—憂うつ	.82	-.11	.03	.65
9. やわらかい—かたい	.71	-.06	-.14	.37
7. あたたかい—つめたい	.69	.14	.07	.63
10. さわやか—じめじめした	.62	.23	-.01	.53
6. 落ち着いた—雑然とした	.04	.83	-.07	.70
3. 静か—騒々しい	-.17	.78	-.31	.67
11. 心地よい—不快	.23	.47	.34	.60
5. 清潔—不潔	.13	.41	-.06	.22
4. 開放的—息苦しい	.18	.39	.23	.36
13. にぎやか—寂しい	-.01	-.39	.83	.77
14. 会話がある—会話がない	-.04	-.12	.78	.57
12. なれている—なれていない	-.19	.44	.70	.53
1. 明るい—暗い	.18	-.02	.51	.41
固 有 値	4.59	2.63	1.07	
因子間相関	F 1	F 2	F 3	
F 1 物理 (力動)	1.00	.34	.66	
F 2 物理 (機能)	.34	1.00	.08	
F 3 関係性	.66	.08	1.00	

## 2) 居心地のよい場所の評価と現実の場所との関係

居心地のよい場所として得られた記述は「なし」、「未記入」、「その他」を除いた324記述であった。以下のTable 2に男女別の出現数上位5項目と、因子分析により得られた3因子の下位尺度に相当する項目の平均値および標準偏差を示した。平均が5に近いほど肯定的な評価がなされた（得点が高かった）ことを示すものとする。居心地のよい場所の評価と現実の場所との関係を検討するために、場所（5）×性別（2）の2要因の分散分析を行った。その結果、「物理的評価（機能性）」における場所の主効果のみが有意であった（ $F(4,233)=9.17, p < .001$ ）。Fig. 1は「物理的評価（機能性）」の各場所に対する評価の平均値を示したものである。Tukey法による多重比較の結果、「ベランダ」の得点が「教室」および「廊下」よ

りも高く、「自分の席」が「教室」よりも高かった（ $MSe=0.37, 5\%$ 水準）。また、各場所における性別ごとの出現数に差があるかどうか検討するために $\chi^2$ 検定を行ったところ、男女の偏りは有意であった（ $\chi^2_{(4)}=14.00, p < .01$ ）。残差分析の結果、「教室」を居心地のよい場所として選択した生徒は、女子が有意に多く（ $p < .05$ ）、「部室」、「ベランダ」を居心地のよい場所として選択した生徒は、男子が有意に多かった（ $p < .05$ ）。なお、「廊下」および「自分の席」についての男女差は認められなかった。

以上より、生徒にとって居心地のよい場所の特徴について考察する。「物理的評価（力動性）」および「関係性」において、居心地のよい場所として選択した場所間で有意な差は見られなかったことから、いずれの場所もその空間での他者との関係のあり方と、場所への肯定的な感情の変化につ

Table 2 居心地のよい場所 上位5項目（出現数・平均値および標準偏差）

項目	出現数*	物理的評価（力動性）				物理的評価（機能性）				関係性			
		男子		女子		男子		女子		男子		女子	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
教室	145 (54/91)	3.29	0.67	3.57	0.68	3.05	0.54	3.23	0.57	4.12	0.73	4.24	0.71
廊下	30 (12/18)	3.48	0.79	3.19	0.52	3.32	0.53	3.32	0.65	4.05	0.71	3.85	0.69
部室	26 (17/ 9)	3.27	0.64	3.72	0.76	3.49	0.88	3.49	0.66	3.70	0.59	4.22	0.65
ベランダ	24 (16/ 8)	3.55	0.61	3.75	0.73	3.98	0.74	3.75	0.44	3.97	0.73	4.06	0.78
自分の席	22 ( 7/15)	3.25	1.21	3.23	0.76	3.66	0.63	3.65	0.59	4.00	0.50	3.82	0.84

\*カッコ内は男女の内訳（男/女）

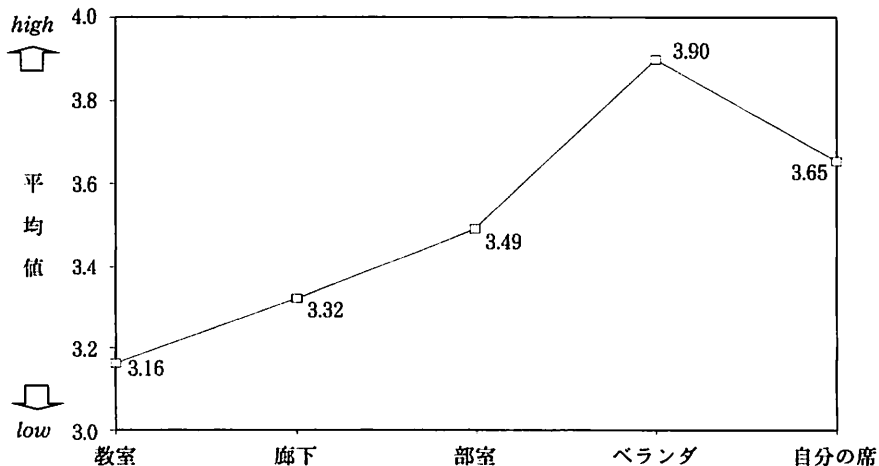


Fig. 1 居心地のよい場所「物理的評価（機能性）」因子の平均値

いて共通した評価により規定されているものと推測される。また、「物理的評価（機能性）」においては、居心地がよいと選択する場所によって評価に差が見られ、「教室」や「廊下」に比べて「ベランダ」の評価は高いものとなっていた。さらに、同じ「教室」内であっても、「自分の席」の得点が高かった。このことから「ベランダ」の開放性やそれとは対照的に独占的に使用できる「自分の席」の機能性が高く評価されたと考えられる。

ここで、各場所を選択する割合においては、男女による人数の偏りが確認されたが、選択した場所への評価では得点に差が見られなかった。この点については、以下、具体的な場所を取り上げ、上記分析の結果を踏まえながら考察する。居心地のよい場所としての出現数が145（全体に占める割合が44.6%）と約半数近い生徒が「教室」を選択していたが、授業や学級活動など学校生活における主要な活動がクラス（教室）単位で行われることが多い学校システムにおいては、教室が生徒の「居場所」となる可能性が高くなるのは当然の結果であるといえる。鈴木・中野（2000）の研究では、教科教室型の学校に通う生徒に比べ、従来型の学校に通う生徒が最も居心地のよい学び、遊び、休息の場としてのどの場面においても「教室」を選択するのには、「教室」以外に選択の余地がないからであろうと述べ、学びの場としての「教室」を失うということは、学校内に居心地のよい場所を失うことになるとの指摘からもいえる。また、女子の方が居心地のよい場所として「教室」を多く選択していたが、「心理的居場所」形成において、関係性を重視する女子（大久保，1999；秦，2000）の方が、男子よりもクラス内に形成された関係を円滑に進めることに居心地のよさを見出しているものと推測される。男子の方が多く選択した「部室」や「ベランダ」については、仲間関係を重視する女子に比べ、男子は開放的な場所や落ち着ける場所できつろぐことに居心地のよさを感じているのか、あるいは、女子が教室を占有する傾向があるために、性別による選択の違いがみられたものと推測される。また、男女差は見ら

れなかったが居心地のよい場所として22名（全体の6.8%）の生徒が「自分の席」を選択していたが、藤井（2003）は、学校内での対人関係に問題があるような場合には、自分の座席といった物理的な場所を拠り所として学校生活を送る可能性を指摘し、こうした拠り所は、自明で安定的な「居場所」ではあるが、より消極的な「居場所」であるとしている。「自分の席」を「居場所」とする生徒には、「自分の席」以外に居心地のよい場所を見つけることができない状態が継続した場合、学校不適応に陥る潜在的な可能性を有しているものと思われる。

### 3) 居心地の悪い場所の因子構造

居心地が悪いと記述された場所の因子構造を検討するために、場所の特徴を示す15項目について因子分析を行った結果、固有値の変化を基準に3因子を抽出した（主因子法・プロマックス回転）。「サポートがある—サポートがない」の項目に関しては、どの因子に対しても負荷が低かったため分析から除外し、14項目について再度分析を行った。男女間の因子構造については「開放的一息苦しい」の項目で第1・第2両因子に同程度の負荷がみられたケースを除いては、同様の因子構造が確認されたため男女込みの分析とした。回転後の各項目の因子負荷量はTable 3に示した通りである。ひとつの因子に.40以上負荷しているものを各因子を構成する項目として採用し解釈を行った。第1因子は「わくわくする—憂うつ (.86)」、「やわらかい—かたい (.71)」などの6項目からなり、場所に対する評価のうち、感情の動きを示すと思われる項目から構成されていたため「物理的評価（力動性）」と命名した。第2因子は「広い—狭い (.79)」、「清潔—不潔 (.76)」などの4項目からなり、場所に対する評価の中でも物理的な機能を示すと思われる項目から構成されていたため「物理的評価（機能性）」因子と命名した。第3因子は「静か—騒々しい (.65)」、「落ち着いた—雑然とした (.59)」など4項目からなり、そこでの他者との関係のあり方を示すと思われる項目から構成

Table 3 居心地の悪い場所の因子負荷量

項 目	F 1 物理 (力動)	F 2 物理 (機能)	F 3 関係性	共通性
8. わくわくする—憂うつ	.86	-.12	.00	.61
9. やわらかい—かたい	.84	-.17	.00	.56
11. 心地よい—不快	.74	.04	.19	.57
12. なれている—なれていない	.65	-.22	-.11	.32
7. あたたかい—つめたい	.53	.26	.05	.50
4. 開放的—息苦しい	.47	.14	.05	.31
2. 広い—狭い	-.16	.79	-.03	.50
5. 清潔—不潔	-.15	.76	.30	.53
1. 明るい—暗い	-.06	.76	-.27	.63
10. さわやか—じめじめした	.37	.47	.06	.56
3. 静か—騒々しい	.06	.04	.65	.41
6. 落ち着いた—雑然とした	.31	.23	.59	.49
13. にぎやか—寂しい	.32	.19	-.54	.57
14. 会話がある—会話がな	.33	.19	-.48	.53
固有値	5.05	2.01	1.49	
因子間相関	F 1	F 2	F 3	
F 1 物理 (力動)	1.00	.62	-.18	
F 2 物理 (機能)	.62	1.00	-.09	
F 3 関係性	-.18	-.09	1.00	

されていたため「関係性」因子と命名した。なお各因子の下位尺度に相当する項目は、居心地のよい場所と悪い場所で多少の変動も見られたが、解釈のしやすさを優先し両者ともに同様の因子名を採用した。

#### 4) 居心地の悪い場所の評価と現実の場所との関係

居心地が悪いと感じる場所として得られた記述は「なし」、「未記入」を除いた計 308 記述であった。以下の Table 4 に男女別の出現数上位 5 項目と、因子分析により得られた 3 因子の下位尺度に相当する項目の平均値および標準偏差を示した。なお、「関係性」因子については「にぎやか—寂しい (-.54)」、「会話がある—会話がな (-.48)」が逆転項目と判断されたため、得点の高低を入れ替えて平均値を算出した。したがって、平均が 1 に近いほど評価が低くなされたと考えられる。居心地の悪い場所の評価と現実の場所との関係を検討するために、場所 (5) × 性別 (2) の 2 要因の

分散分析を行った。その結果、「物理的評価 (力動性)」、「物理的評価 (機能性)」、「関係性」の 3 因子すべてにおける場所の主効果が有意であった ( $F(4,238)=7.90, p<.001$ ;  $F(4,237)=50.73, p<.001$ ;  $F(4,238)=14.21, p<.001$ )。Fig. 2~4 は「物理的評価 (力動性)」、「物理的評価 (機能性)」、「関係性」の各場所に対する評価の平均得点を示したものである。Tukey 法による多重比較の結果、「物理的評価 (力動性)」では、「トイレ」の得点が「教室」よりも低く、「トイレ」および「職員室」は「体育館」よりも低かった ( $MSe=0.43, 5\%$ 水準)。「物理的評価 (機能性)」では、「トイレ」がすべての場所における得点よりも低く、「教室」および「廊下」が「職員室」よりも低かった。また、「廊下」の得点は「体育館」よりも低かった ( $MSe=0.39, 5\%$ 水準)。「関係性」では、「教室」、「廊下」、「体育館」の得点が「トイレ」および「職員室」よりも低く、「教室」、「廊下」は「体育館」よりも低かった ( $MSe=0.48, 5\%$ 水準)。また、各場所における性



Table 4 居心地の悪い場所 上位5項目 (出現数・平均値および標準偏差)

項目	出現数*	物理的評価 (力動性)				物理的評価 (機能性)				関係性			
		男子		女子		男子		女子		男子		女子	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
教室	83 (33/50)	2.24	0.81	2.11	0.56	2.85	0.73	2.78	0.71	2.22	0.77	2.36	0.64
トイレ	64 (31/33)	1.79	0.65	1.83	0.56	1.59	0.48	1.64	0.56	3.29	0.56	2.56	0.67
職員室	54 (19/35)	1.81	0.67	1.94	0.56	3.29	0.98	3.04	0.59	3.39	1.07	3.39	0.55
廊下	31 (11/20)	1.86	0.63	2.37	0.63	2.32	0.77	2.80	0.57	2.16	0.56	2.06	0.70
体育館	19 (8/11)	2.85	0.65	2.39	0.61	3.22	0.59	3.27	0.47	2.66	0.64	2.70	0.72

\*カッコ内は男女の内訳

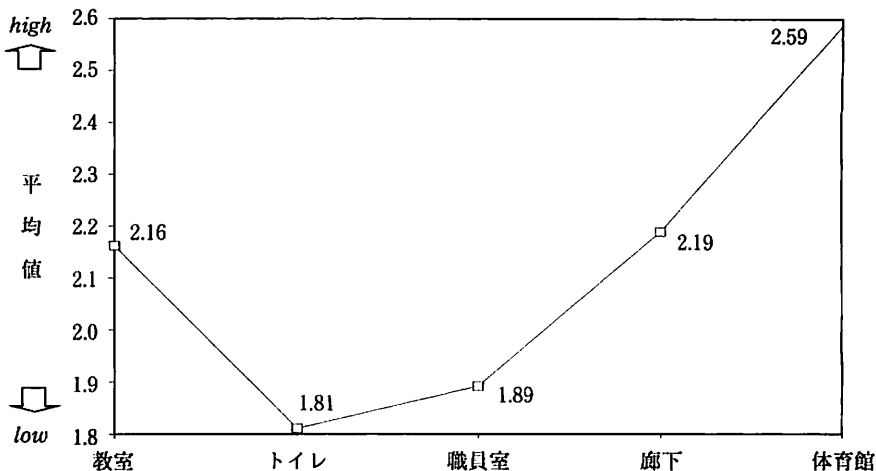


Fig. 2 居心地の悪い場所「物理的評価 (力動性)」因子の平均値

別ごとの出現数に差があるかどうか検討するために  $\chi^2$  検定を行った結果、出現数における男女の偏りは有意ではなかった ( $\chi^2_{(4)} = 2.66, n. s.$ )。

以上の結果について考察すると、場所の選択に際して男女による偏りが見られなかったことから、性別によらず居心地の悪さを規定する要因が存在するものと推測される。一方、居心地の悪い場所として選択された場所に対する「物理的評価 (力動性)」、「物理的評価 (機能性)」、「関係性」の得点には特徴的な結果が見られた。居心地のよい場所に比較して、居心地の悪い場所では、関係のあり方や感情の変化は、空間の機能も含めた状況によって違いが見られた。

「トイレ」については、「物理的評価 (力動性)」、「物理的評価 (機能性)」の2因子において評価が低かったことから、「トイレ」における居心地の悪さは、空間の有する機能と否定的な感情の変化

が評価に関連しているものと考えられる。また、「関係性」の得点が高かった点について、ここでいう「関係性」は、逆転項目と判断される項目の得点を入れ替えて分析したため、居心地のよい場所におけるものとは意味合いがやや異なるものであった。すなわち、得点が高いということは、「静か」で、「落ち着いた」、「寂しく」、「会話のない」空間であると評価されたことになり、他者との相互作用が想像されにくい空間であると考えられる (居心地のよい場所において「関係性」の得点が高いということは「にぎやか」で「会話があり」、「慣れた」、「明るい」空間であった)。したがって、「トイレ」においては空間の物理的機能とそれに関連した否定的な感情の動きによって居心地の悪さが規定され、そこでの他者との関係は消極的なものであることが予想された。「職員室」の評価では「物理的評価 (機能性)」の得点、す

## 高校生における「居場所」としての学校の認知について

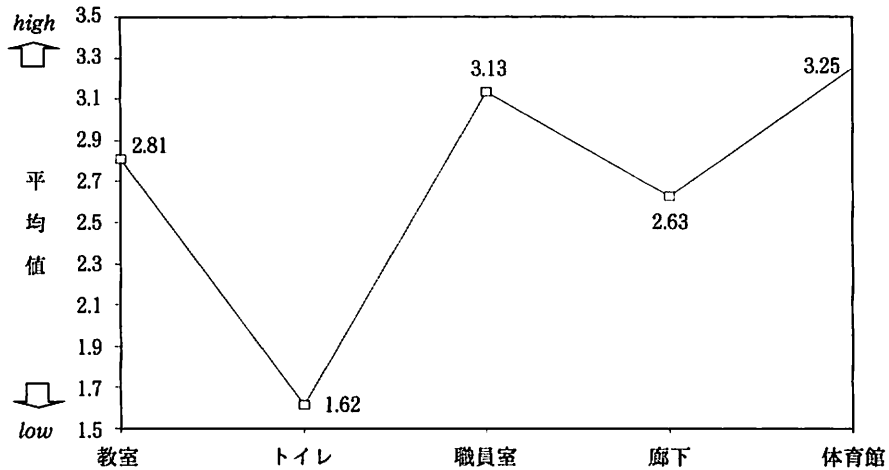


Fig. 3 居心地の悪い場所「物理的評価（機能性）」因子の平均値

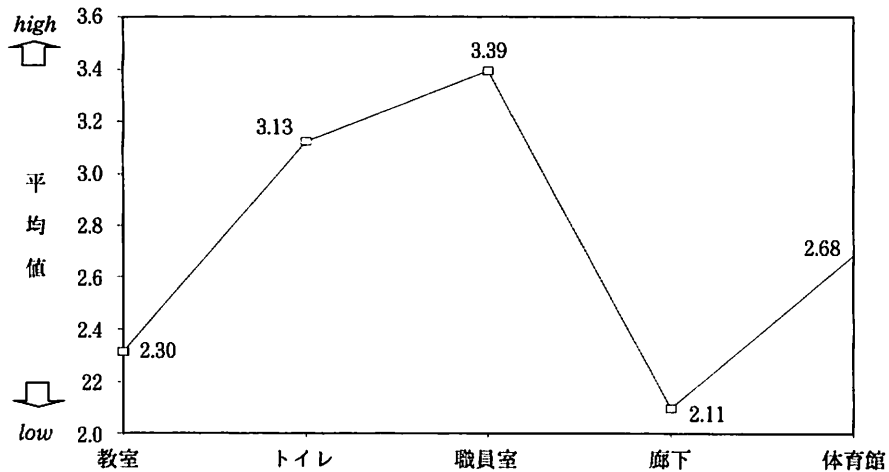


Fig. 4 居心地の悪い場所「関係性」因子の平均値

なわち「広さ」、「清潔さ」、「明るさ」といった得点や「関係性」の得点が高かった。一方で、「物理的評価（力動性）」の得点が低かったことから、空間の機能が居心地の悪さに影響しているというよりは、教師との消極的な関係性が評価に影響しているものと思われる。「体育館」については、「物理的評価（機能性）」および「物理的評価（力動性）」ともに高い評価がなされた一方で、「関係性」の得点がそれほど高くなかったことから、空間の有する物理的機能やそれに関する感情の変化というよりも、そこに居合わせる他者との関係において居心地の悪さが規定されているように思われる。分類前の自由記述には、「集会時の体育館」

といった記述が多くみられ、大勢の生徒が集合している様子が想像されたため、パーソナルスペースが確保されにくい状況が居心地の悪さに影響したのではないかと考えられる。最後に、居心地のよい場所としても選択されていた「教室」、「廊下」が居心地の悪い場所としても多く選択されていた点に注目したい。物理的には同じ空間であっても、その空間での居心地をどのように捉えるかによって、本来は変化するはずのない「明るさ」や「広さ」といった物理的特徴に対する評価にも変化が見られたこと、他者の存在が居心地の悪さに影響を及ぼしているといった点が推測されるため、今後はこのような認知の変化をもたらす要因につい

て他者との関係性の質を含め、詳細に検討する必要があると思われる。

## 2. 日常生活における「居場所」イメージについて

潜在的な「居場所」要因を検討するために、投影法による調査を行った。絵に対する説明と「居場所」に必要なものの自由記述を参考に、「居場所」イメージが投影されていると判断できる計167の描画を分析の対象とした。分類に当っては大学教員と大学院生の2人による合議の上、以下の3つの視点から分類を行った。まず、特徴的な描画を項目ごとに分類し(分類1)、次に、ひとりであるのか複数であるのかという視点が「居場所」理解の重要な視点であるとの指摘(小畑・伊藤, 2001・2003)を参考に、居場所「イメージ」に自分以外の他者が存在しているか否かという基準による分類を行った(分類2)。さらに、日常生活における「居場所」イメージに、学校がどれだけ選択されているかという点について検討するために、イメージに学校が投影されているか否かを基準とした分類を行った(分類3)。

### 1) 特徴的な描画(分類1)について

Table 5は、特徴的な描画分類の出現数を項目および男女別に示したものである。どのカテゴリーにも分類し得ない描画は「その他」とし、分析から除外した。各場所の選択に男女による違いがあるかどうかを検討するために $\chi^2$ 検定を行った結果、人数の偏りは有意でなかった( $\chi^2_{(5)} = 1.16$ , *n.s.*)。Fig. 5は、各分類に代表的な描画のサンプルを示したものである。風景画が男女とも一番多く、次に自分の部屋を描いたものが多かった。

以下、分類方針も含めそれぞれの項目について考察する。

#### (1) 風景(屋外)

「森や川などの自然が多いところ」、「空がすっきり見えて、川のせせらぎが聞こえるところ」といったように、具体的な場所は特定できないが、自然物などから構成される風景が描かれている描画、さらには屋外の明るく開放的な「屋上」や、狭く人目につかない暗い「建物の裏」といった、具体的な場所を描いたものを「風景(屋外)」と分類した。世の中の人工的な雑踏から一步距離を置いて、自然との一体感を感じるというイメージや、自分なりにくつろげる空間が「居場所」イメージに投影されていたようである。「居場所」として選択される空間は明るい場所から暗い場所、広い場所から狭い場所といったように選択する人によってその物理的特徴は様々であった。

#### (2) 風景(屋内)

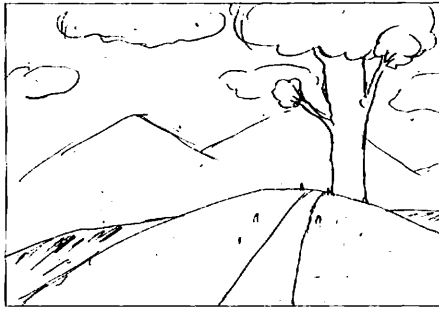
「自分の家」や「居間」の様子を描いたものや、「教室」や「保健室」などの学校内の様子を描いたものを「風景(屋内)」と分類した。注目されるのは、自分の家を連想した描画が出現数28と多かったことである。妙木(2003)は心理士としての経験から「居場所」を「自分の家」だと感じている人はかなり多いとし、その中には人の集まりである「家族」、単位としての「家庭」、住居空間である「家屋」の3つの意味が含まれていると指摘している。高校生が「自分の家」に投影した「居場所」イメージにはどういった意味があるのかについて考えてみる必要がある。

#### (3) 自分の部屋

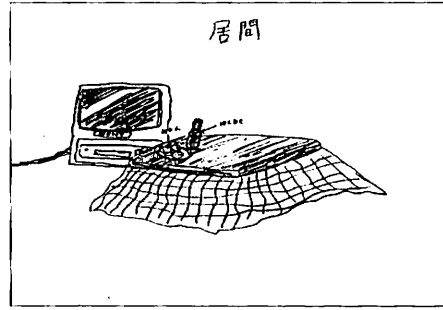
描画用紙の枠を自室と見立て(もしくは自ら枠を設定)、その室内を構成する様々なアイテムが

Table 5 特徴的な描画の分類(分類1)

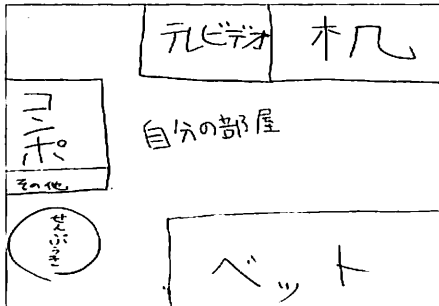
	風景 (屋外)	風景 (屋内)	自分の部屋	好きなもの (実在するもの)	好きなもの (趣味・キャラクター)	人のみ	合計
男子	18	17	16	12	9	7	79
女子	21	17	16	9	7	9	79
合計	39	34	32	21	16	16	158



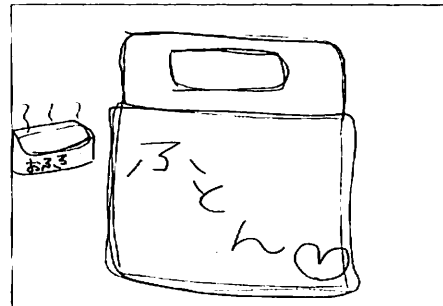
「風景(屋外)」



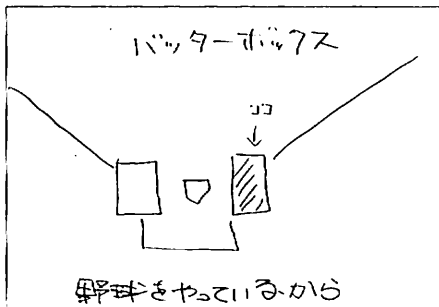
「風景(屋内)」



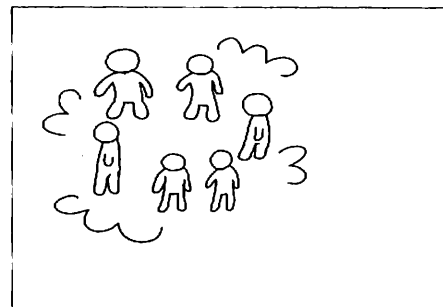
「自分の部屋」



「好きなもの(実在するもの)」



「好きなもの(趣味・キャラクター)」



「人のみ」

Fig. 5 各カテゴリーに特徴的な描画(分類I)

描かれているものを「自分の部屋」と分類した。描かれたアイテムの中でも、特に「ベッド(ふとん)」、「机・椅子」、CDなどの「オーディオ機器」といった出現数が顕著であった。周囲から隔てられた空間で、音楽を聴きながら横になって身体を休めたり、腰を下ろしたりといった休息することのできる空間が「居場所」形成に重要であるものと推測される。住田(2003)は、子どもの生活領域を家庭・学校・地域の3領域に区別し、各生活領域における小・中学生の「居場所」の実態を検討したが、この調査において家庭生活領域では

小学生では少なかった「自分ひとりで自分の部屋にいるとき」といった型が中学生では主要な型となっていることを指摘した。投影されたイメージが実際に自分の部屋の間取りを描いたものであるのか、それとも願望であるのかは判断しかねたが、自室での自分ひとり時間が高校生の時期においても重要なものであると思われる。

#### (4) 好きなもの(実在するもの)

具体物が描かれているものを「好きなもの(実在するもの)」として分類した。その中でも多くみられたのが「ベッド(ふとん)」、「お風呂」と

いった休息をイメージさせるものであった。「ベッド」は「自分の部屋」にも多く描かれていたものであり、部屋に配置されているものの中でも特に「居場所」イメージに合致するものなのかもしれない。

(5) 好きなもの（趣味・キャラクター）

「プール」、「バッテリーボックス」といった活動が行われている場所や、好きな音楽が流れているイメージといったように、自分の趣味や特技を投影した描画や、「ドラえもん」、「アンパンマン」といったアニメの「キャラクター」を描いたものを「好きなもの（趣味・キャラクター）」として分類した。自分の好きなことをして存分に楽しんでいる様子や、楽しく夢のあるイメージ、すなわちカタルシス的な感情を実感できる場面も「居場所」イメージにつながるようである。

(6) 人のみ

上記分類のように、ある程度の具体的な場面が連想されるような描画ではなく、「友だちと会話をしている様子」、「手をつないでいる様子」、「笑顔があふれる場所」といったように他者とやりとりが垣間見える場面を描いたもの、あるいは人の

みを描いたものなどを「人」と分類した。何人かのもので楽しく交流しているイメージと、それとは逆に全くのひとりであるイメージとが投影されていた。

2) 他者の存在想定の有無（分類2）

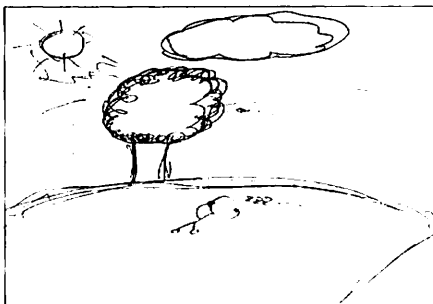
Table 6 は、「居場所」イメージに他者の存在を想定しているかどうかによる分類の出現数を項目および男女別に示したものである。どのカテゴリーにも分類し得ない描画は「その他」とし、分析から除外した。イメージの投影に男女による違いがあるかどうかを検討するために  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2_{(1)} = 9.13, p < .01$ )。Fig. 6 は、両分類に代表的な描画のサンプルを示したものである。

小畑・伊藤 (2001・2003) は、ひとりであるのか複数でいるのかという視点の重要性を指摘しているが、検定の結果、男子よりも女子の方が理想の「居場所」イメージに他者の存在を仮定していることが明らかとなった。これは、大久保 (1999) の、心理的「居場所」を形成する上で、男子よりも女子の方が人間関係を重視していると

Table 6 他者の存在想定の有無（分類2）

	他者の存在を仮定	他者の存在を仮定せず	合計
男子	10**	74**	84
女子	25**	55**	80
合計	35	129	164

\*\*  $p < .01$



「他者の存在を想定していない描画」



「他者の存在を想定している描画」

Fig. 6 他者の存在想定の有無を示す描画（分類2）

の指摘や、落合・佐藤（1996）の同性の友人との付き合い方において、女子はお互いがひとつになれるような関係を望んでいる一方で、男子は友だちとは異なる存在であるという認識の違いがあるといった先行研究を支持するものであり、対人関係における性差が「居場所」イメージにも反映されたものと思われる。

3) 学校場面の想定の有無（分類3）

Table 7は、「居場所」イメージに学校場面を想定しているかどうかによる分類の出現数を項目および男女別に示したものである。イメージの投影に男女による違いがあるかどうかを検討するために $\chi^2$ 検定を行った結果、人数の偏りは有意で

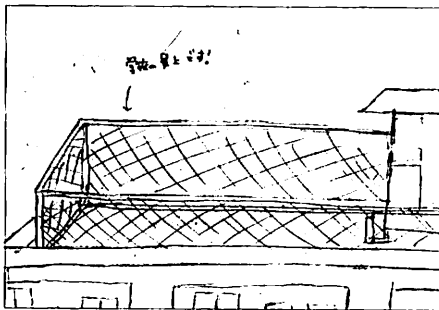
なかった( $\chi^2_{(1)} = 0.76, n. s.$ )ため、男女込みとして検定を行った結果、人数の偏りは有意であった( $\chi^2_{(1)} = 120.00, p < .001$ )。なお、Fig.7の学校をイメージした描画について、学校外のイメージは分類1に対応したFig.5で示したため、ここでは学校内の「居場所」のみを掲載した。

分析の結果、日常生活における理想の「居場所」イメージに学校場面はほとんど投影されていなかった。これは学校が居心地のよい場所、すなわち生徒にとっての理想の「居場所」場面とはやや異なる状況にあることを示しているとも考えられ、彼らが学校を「居場所」としなくとも、自分なりに居心地のよい場所を有しバランスを保ちながら、学校生活を送っているものとの予測も可能である。

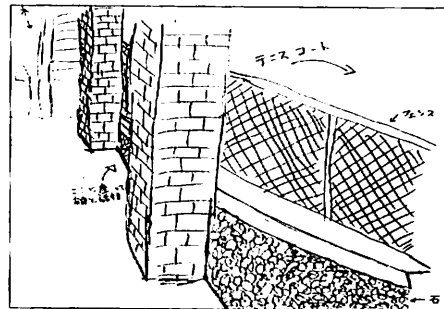
Table 7 学校場面の想定の有無

	学校場面を想定	学校場面を想定せず	合計
男子	4**	75**	79
女子	7**	75**	82
合計	11	150	161

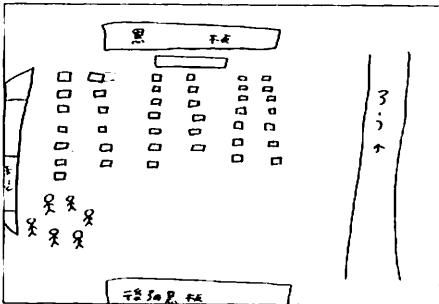
\*\*  $p < .01$



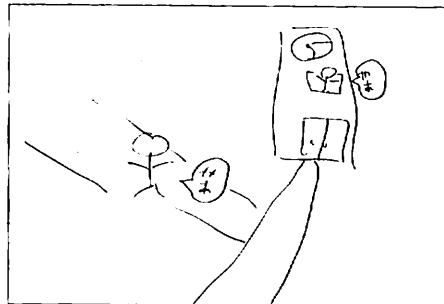
「屋上」



「渡り廊下」



「クラス」



「仲間」

Fig. 7 学校場面を想定した描画の例

とはいえ、高校生にとって学校が多く時間を過ごす生活場面のひとつであるとするならば、少しでも居心地よく、楽しく学校生活を送ることができればなおよいであろう。「居場所」イメージとして学校を描いた描画には、仲間と楽しく交流している様子や、自分なりにくつろげる場所を見つけホッと一息ついている様子など、限られた状況の中でも自分なりの「居場所」を確保していこうとする前向きな意志を感じ取ることができた。高校生における居場所として学校がどのように認知されているかその実態を検討したが、今後どのような教育的介入をすれば居心地よい場所として学校がイメージされるのかについて考えていきたい。

#### 引用文献

- 榎本淳子（1999）青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子（2000）青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関係. 教育心理学研究, 48, 444-453.
- 藤井美保（2003）「居場所」としての学校と子どもの対人関係（住田正樹・南博文編 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在）九州大学出版会, 229-248.
- 文部省（1992）登校拒否（不登校）問題について—児童生徒の“心の居場所”づくりを目指して—。学校不適応対策調査研究協力者会議報告書
- 妙木浩之（2003）「心の居場所」の見つけ方—面接室で精神療法家がおこなうこと。講談社
- 中村泰子（1999）「居場所がある」と「居場所がない」との比較—○△□法の基礎的研究として—大阪市立大学生生活科学部 児童・家庭相談所紀要, 15, 13-22.
- 中村泰子（2000）○△□法と居場所イメージ—3事例の検討から—。臨床描画研究 XIII, 金剛出版, 240-260.
- 中野和巳（1997）学校をもっと居心地のよい空間にしよう—「居場所」づくりとしての施設改革—。公評, 38 (6), 112-119.
- 小畑豊美・伊藤義美（2001）青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類—。情報文化研究, 14, 59-73.
- 小畑豊美・伊藤義美（2003）中学生の心の居場所の研究—感情と行動及び意味からの考察—。情報文化研究, 17, 155-167.
- 落合良行・佐藤有耕（1996）青年期におけるつきあひ方の発達の变化. 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 萩原健次郎（1995）若者にとっての「居場所」の意味. 日本社会教育学会紀要, 33, 37-44.
- 萩原健次郎（2001）子ども・若者の居場所の条件（田中治彦編著 子ども・若者の居場所の構想）学陽書房, 51-65.
- 大久保智生（1999）心理的居場所に関する研究(1)—概念の検討と尺度の作成. 第8回日本性格心理学会発表論文集, 92.
- 秦 彩子（2000）「心の居場所」と不登校の関連について. 臨床教育心理学研究, 26, 97-106.
- 住田正樹（2003）子どもたちの「居場所」と対人的世界（住田正樹・南博文編 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在）九州大学出版会, 3-17, 101-168.
- 鈴木智子・中野明德（2000）学校空間と心の居場所. 福島大学教育実践研究紀要, 39, 55-62.
- 田中治彦（2001）子ども・若者の変容と社会教育の課題（田中治彦編著 子ども・若者の居場所の構想）学陽書房, 15-35.
- 富永幹人・北山 修（2003）青年期と「居場所」（住田正樹・南博文編 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在）九州大学出版会, 381-400.
- やまだようこ（2003）場所に居ることの身体イメージ—天地のあいだと「立つ」「坐る」「寝る」図像—（住田正樹・南博文編 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在）九州大学出版会, 39-81.

#### 謝 辞

調査の実施にあたり、春日 裕先生をはじめとする諸先生方からは多大なご協力を賜りました。調査にご協力していただいた生徒の皆さんにも心より感謝申し上げます。

## Image of School as “Beloved Place” for High-school Students

Yayoi Watanabe and Sayuri Kotaka

The purpose of this study is to examine the psychological factors which shape an image of a “beloved place” for high school students at school. The beloved place are translated into “*i-basho*” in Japanese. It posits that individuals require a “special relaxing and secure space from the points of view of both relationship with others and physical things. Subjects were 351 first to third grade students. They were each given a questionnaire to assess their image of both “a good” and “bad” place for the psychological place by the SD method. They were also asked to draw an image of their beloved place. Results showed that a good place was constructed from three key factors: physical (force dynamics), physical (functionality), and relational, and that a bad one was also constructed from the same factors. The images of drawings were divided into six categories: a landscape, a sight inside, their own rooms, a favorite thing, a hobby or a cartoon character and persons only. Female students tended to draw pictures showing the existence of people. Most of them did not draw things and places relating to school as beloved place.

**Keywords:** a beloved place, image, school, high school students